

令和5年度 京都府公立大学法人両大学連携・共同研究支援事業研究成果

事項	所属	職名	氏名
研究代表者	京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学	併任助教	松本 佳大
研究組織の体制	京都府立大学公共政策学研究科博士前期課程福祉社会学	大学院生	尾場 幸子
研究の名称	京都における外国出身保護者対応への保育士のモチベーションと負担感からみる解決策の探索		
研究のキーワード	保育所、外国出身保護者対応へのモチベーション、外国出身保護者対応への負担感、外国出身保護者対応への解決策		
研究の概要	<p>京都市においては、外国出身保護者の保育所利用機会の増加に伴い保育現場ではグローバル化・多様化が進んでおり、保育士の外国出身保護者への対応はもはや一部の保育所の課題ではなく、今後多くの保育所において更なる対応力の向上が求められる課題であると推測される。2018年に改訂された「保育所保育指針」の中には、家庭と保育所の相互理解を図るため、子どもに関する日々の情報交換を細やかに行うよう努めることが明文化されており、保育所では保育士と保護者間のコミュニケーションツールとして「連絡帳」「お便り」「送迎時の対話」を重要な情報伝達的手段として活用することが推奨されている。しかし、保育現場において多言語に対応するための通訳やIT機器等の活用は不十分であり、現場での対応は一部の保育士や保護者の努力に委ねられているのが現状である。</p> <p>本研究では、京都府においても特にグローバル化が進む京都市において、①アンケート調査、②インタビュー調査を組み合わせることにより、京都の保育現場の現状を明らかにし、特に情報伝達業務を中心とした外国出身保護者対応における業務負担を詳しく調査することで、外国出身保護者への対応の負担感軽減のための実践的かつ持続可能な解決策を見出す。</p> <div style="text-align: center;"> <pre> graph TD     A[アンケート調査 ・ 外国出身保護者対応へのモチベーション調査 ・ 現場保育士メンタルヘルスを中心とした現状調査] --&gt; B[インタビュー調査 ・ 連絡帳・お便り・送迎時の対話を中心とした内容 ・ 上記を行うに際しての保育士の思いや困りごと]     A --&gt; C[保育士の負担をなるべく増やさない効率的な外国出身保護者への情報伝達方法の探索]     B --&gt; C     C --&gt; D[保育士と外国出身保護者の連携を強化することで質の高い保育の実現]             </pre> </div>		

<p>研究の背景</p>	<p>保育所は単に預かりサービスを提供する場ではなく子どもの育ちの場でもあり、保育士と保護者との連携は質の高い保育と子どもの健やかな成長のためには極めて重要である。住民基本台帳によると京都市在住の外国人住民は2023年4月時点で50,345名と5年前から約7,000人増加し、そのうち子どもを保育所に預け、学業や仕事に従事することが多い20代、30代の人口は25,892名（51.4%）にのぼる。外国出身保護者の保育所利用機会の増加に伴い保育現場ではグローバル化・多様化が進んでおり、保育士の外国出身保護者への対応はもはや一部の保育所の課題ではなく、今後多くの保育所において更なる対応力の向上が求められると推測される。2018年に改訂された「保育所保育指針」の中には、家庭と保育所の相互理解を図るため、子どもに関する日々の情報交換を細やかに行うよう努めることが明文化されており、保育所では保育士と保護者間のコミュニケーションツールとして「連絡帳」「お便り」「送迎時の対話」を重要な情報伝達的手段として活用することが推奨されている。しかし、保育現場において多言語に対応するための通訳やIT機器等の活用は不十分であり、現場での対応は一部の保育士や保護者の努力に委ねられている現状がある。これまで保育士が外国出身保護者への対応に困難を抱える現状が複数の先行研究で指摘されているものの、その解決策に関する研究は乏しい。発達障害やアレルギーを持つ児童への特別な対応や、昨今問題となっている感染症対策など、保育士の業務負担は増加の一途を辿っている。勤務長時間化や低賃金による保育士のバーンアウトの問題も指摘されており、我が国の将来を担う子どもの健やかな成長のためにも保育士の業務負担軽減は急務である。</p>
<p>研究の進捗状況と成果</p>	<p>本研究課題の進捗状況については以下の通りである。</p> <p>A. アンケート調査</p> <p>京都市内の保育施設(268 箇所)に勤務する保育士を対象としてアンケート調査を実施した。</p> <p>アンケート調査内容は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>i) 基本属性 (年齢、性別、教育歴、保育士歴、現職場の勤務歴、雇用形態、労働時間、婚姻有無、世帯構成、世帯年収)</li> <li>ii) 外国出身保護者対応へのモチベーション調査票</li> <li>iii) 努力-報酬不均衡モデル調査票</li> <li>iv) バーンアウトに関する調査票 (BAT-J)</li> <li>v) 心理的ストレス反応 (K6)</li> </ul> <p>VI) 身体症状症評価尺度 (日本語版 SSD 12)</p> <p>京都市内の保育施設 268 箇所に対して 10 部ずつの送付を行い、2680 部のうち 340 部 (12.7%) を回収できた。</p> <p>アンケート内容については、入力作業は既に済ませており、外国出身保護者対応へのモチベーションと各因子の関連について解析を行っていく。内容については下記の通りである。</p> <p>質問項目において欠損があるサンプルについては除外する。基本属性、各尺度の記述統計を行い、各尺度得点のデータの分布を確認する。また、各調査尺度に対して、カイ二乗検定にて高モチベーション群と低モチベーション群の2群間比較を実施する。さらにロジスティック回帰分析により、モチベーションにかかわる要因について解析を行う。</p>

	<p>有意水準は<math>p &lt; .05</math>とする。解析方法は上記の予定としているが、得られたデータ数によって異なる解析を行うことがある。</p> <p>B. インタビュー調査        インタビュー項目は下記の通り        イ) 保育士の属性(年齢、保育士歴、現園の勤務歴、職位、雇用形態)        ロ) 外国出身保護者に向けた連絡帳・お便り・送迎時の対話の内容        ハ) 上記情報伝達業務における保育士の思いや困りごと。</p> <p>上記の内容について予定通り京都市内の保育施設に勤務する保育士15名にインタビュー調査を実施できた。文字起こしについては完了しており、現在分析を進めている。分析については以下の通りである。</p> <p>すべてのインタビューは対象者の許可を得た上で録音し、録音データはすべて逐語録としてテキスト化する。データを研究者が十分に読み込んだ後、データが示す現象について主な内容を書き出し、研究者間でディスカッションを行うことで内容を洗練する。データをコード化し、番号を付したうえで意味のまとまりごとに分類し名前をつける。この段階においては定期的に研究者間で議論を重ね、研究目的や研究疑問に沿った内容が抽出できているか、分類が適切なものであるかを丁寧に確認することを繰り返す。最終的にサブテーマとテーマを決定し、研究者間で最終確認を行う。</p>
<p>地域への 研究成果の 還元状況</p>	<p>上述の通り、本研究テーマに関して、量的質的双方の面において十分なデータの収集を行うことができた。今後得られたデータの解析を行うことによって、現在の外国出身保護者対応における課題を明らかにした上で、保育士にとって負担が少ない形で効率的に外国出身保護者対応を行う解決方法を明らかにし地域福祉向上へ貢献していく。</p>
<p>研究成果が 両大学連携に もたらす意義</p>	<p>これまで外国出身保護者対応における研究は、質的研究によるものが中心であり解決方法に関する研究も少なかった。本研究は質的研究だけでなく、量的研究も組み合わせを行ったうえで解決法を探索する新しい研究である。本研究で得られる知見は、京都発の全国にも通用する知見になるものと確信をしている。保育学と精神医学の連携はこれまでの両大学連携にはなかった領域であり、その意義は大きいと考える。</p>
<p>研究発表</p>	<p>未発表</p>